



限界まで可能性に挑み続ける田中幹也^{かんや}さんを迎え

植村直己冒険授賞式・記念講演会 「厳冬季カナダを生きぬく、雪と氷の2万2千キロ踏破」



▲中貝市長(右)から盾と記念メダルを受け取る田中さん

6月7日、日高文化体育館で、2013「植村直己冒険賞」授賞式および記念講演会を開催しました。

「植村直己冒険賞」受賞者の田中幹也さん(48歳・東京都在住)は、厳冬季のカナダに魅せられ、1995年から18回、その雄大な雪原を山スキーや自転車といった人力での踏破に挑み続けました。2013年には、カナダ中央平原南部200kmを山スキーで踏破。自分自身が本当にやりたい冒険の舞台を求め「可能性を限界まで出し尽くすこと」をテーマに冒険を続けています。

当日、西木正明選考委員の選考評に引き続き、中貝市長から盾とメダルの授与が行われました。田中さんは「この賞がもらえて良かったです。本当にありがとうございました」と受賞の喜びを話しました。

また、地平線会議代表世話人の江本嘉伸^{よしのぶ}さんとの対談形式で「厳冬季カナダを生きぬく～雪と氷の2万2千キロ踏破～」と題した記念講演も行われました。約750人の観衆は、田中さんの氷原を突き進む過酷な行動や凍傷になった写真などの極寒の冒険の厳しさに、くぎ付けになりました。さらに、田中さんは「興味があることは結果を考えずにとりあえずやってみよう」と自身の経験を踏まえ参加者に呼び掛けました。

《問合せ》植村直己冒険館 ☎44-1515



▲選考委員の西木正明さんは「結果よりも冒険のプロセスを評価した」と選考評を述べた



▲オープニングでは、府中小学校3年生の児童が植村直己をテーマに『自分らしく生きる』と題し、歌などを披露

講演要旨

厳冬季カナダを生きぬく

〜雪と氷の2万2千キロ踏破〜

■カナダの四つのエリア

―カナダの冒険ルートは？

大きく分けて四つのエリアに行きました。最初は北部のノースウエスト準州です。二つ目が皆さんにもなじみがある南西部のカナディアンロッキー。そして東部にあるラブラドル半島、もう一つは近年通った中央平原です。カナダには手付かずの大自然が広がり、一度旅に出ると大体一カ月くらいは誰とも会えません。

■極寒での旅を支える食料

―水の調達方法は？

雪を溶かして作ります。持ち運び



▲対談する田中さん(右)と聞き手の江本さん(左)

はず、必要に応じて必要な分だけ作ります。行動中はほとんど水を飲みません。休むときにコーヒーか紅茶を飲みます。

―持って行く食べ物？

現地(カナダ)で調達したインスタントラーメンやオートミール、何も挟んでいないビスケットが中心です。ビスケットはクリーム入りの方がカロリーもあり、おいしいのですが、低温下だとクリームが凍ってしまいかめません。板チョコもカチカチになってしまっているので、粒状のチョコレートを大量に持って行きます。食事は調理の手間がいらぬのが一番重要ですよ。

■凍傷と向き合う

―極寒のカナダは凍傷との戦いです。凍傷の影響は？

足の親指など数本に重度の凍傷を負い、指先が黒くなり再生不能となりました。その先端を切断したので指が少し短くなっています。毎冬のように凍傷を負っており、その部分が凍傷になりやすくなっています。しかし、自分は慣れてしまったので、そんなに動揺しません。中央平原の旅では鼻と頬に凍傷を負い、一時的に目が見えなくなりました。目が凍傷を負ったのではなく、頬が凍傷で突っ張って目が開かなくなったのです。幸い患部の切除をギリギリ免れたのでホッとしました。

何か興味あることや、やろうか迷っていることがあったら、結果を考えずにとりあえずやってみよう



▲凍傷で指先が壊死。のちに切断(写真提供：田中幹也)

■始まりはロッククライマー

―田中さんの冒険の原点はクライミング。植村さんも垂直と水平の両方の世界を冒険されました。20代のころは、どんなことをしていましたか？

冬の黒部ダム近くにある崖壁や南アルプスの甲斐駒ヶ岳などに登りました。あえて難しいルートを選ん自分の可能性に挑戦し続けました。しかし、あるときクライミングに限界を感じ、水平方向の冒険に移行しました。クライマーには天候や崖壁の岩の具合など、あらゆる状況からの確な判断をし、瞬時に処理をする決断力が求められます。そんな能力や技術を生かし、今は高層ビルの窓ガラス清掃の仕事もしています。海外の山に行くようになってから、よ

り四季を感じる日本の山が良く思えるようになりました。この豊岡、植村さんの故郷にも良い山がたくさんあると思います。

■受賞して良かった

―誰もが憧れる冒険賞。受賞しているのかと、ずいぶん本気で悩んだようでしたが？

正直悩みましたが、結果的に賞を授かったことをうれしく思っています。自分の冒険は、大衆に受け入れられたらおしまいというのが一番強くあります。誰にも行き先を告げずにやった方が、行動そのものに、より集中できます。私が信頼あるいは良しとする道を支持する人たちに、受け入れられればいいというのが、基本的なスタンスです。人から絶対無理だと言われたときが一番燃えます。計画している段階で、できそうだなって思ったらやらないです。ちよつと、できそうにないなって思ったら、やるって感じですよ。

■とにかくやってみよう！

―豊岡の子どもたちにメッセージを あえて頑張れとか努力しろとかは言いませんが、例えば何か興味があることで、やろうかどうか迷っていることっていろいろあると思います。そういうときは、あまり結果を考えないで、とりあえずトライしてみてください。